

工藤篤子メールマガジン 136号

2009.02.12

●ウィッテンベルクでの祈り



お元気でいらっしゃいますか？

前回の盗難のことでは、多くの方から慰めと励ましのメールをいただきました。心からお礼申し上げます！

ただ、お一人ひとりにお礼のメールを差し上げることが

できませんでしたこと、どうぞお許してください。またお祈りお支えくださいました皆様、ほんとうにありがとうございました！今はドイツのパソコンのキーボードにもすっかり慣れ、順調に、次の奉仕の準備をしています。

私は、盗難に遭遇した日の週末、祈りの時を過ごそうと前もって計画を立てていたのですが、盗難後のたくさんの処理作業の中、とてもそのような時を持つことができなくなりました。そして、しばらくは、ハンブルクを離れて祈りの時を持つのは難しいかもしれない、と思っていたのです。

ところが、その次の週、「目を覚まして祈っていなさい」という主からの語りかけが心に迫りました。そして、「この家をお守りください」と、熱心に祈ってこなかった自分に気付かされたのです。さらには、この家の人たちの救いのため、ハンブルクのため、ドイツのため、日本のため、政治家のため・・・そのような祈りが、ほんとうに欠けていたことに気付かされ、悔い改めに導かれました。

●ウィッテンベルクでの祈り

それで、すべてを一時中断し、予定より一週間遅れて、祈りの日々を過ごすためにルターの町ウィッテンベルクに行きました。今回の祈りの場所をウィッテンベルクにしたのは、ルターが提唱した「信仰のみ、聖書のみ、恵みのみ」の信仰の原点に今一度立たせていただきたいと思ったからです。



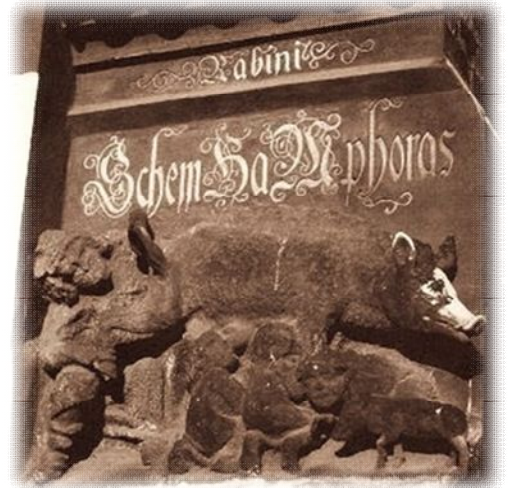
祈りの合間、毎日1～2時間散歩に出かけました。時にはルター・ハウスに行って、ルターの文献を読み、時には市教会マリーエン・キルヒェに行って、ルカス・クラナハの祭壇絵や聖画を見ながら神の深い愛に触れ、十字架の購いに感謝の祈りを捧げたり、オルガンの賛美演奏を聴いたりしました。1月の寒い時でしたので、どこへ行っても観光客はほとんど見当たらず、ルターハウスでも、しばらくここかしこで祈りにたたずむことができました。

それまでも祈りと共に生活していたと思ってましたが、ルターの町での祈りの数日を過ごした後は、祈りの中での生活に導き入れられるようになりました。ドイツでの、今のこの貴重な主との交わりの時を、大切にしたいと思っています。

●Judensau と犠牲者の記念碑

ところで、ヴィッテンベルクのマリーエン・キルヒェでは、前回の訪問で見つけることができなかった、外壁の豚のレリーフを見ることができました。これはユダヤ人を軽蔑し嘲笑した、いわゆる Judensau (ユダヤ人の豚) と呼ばれるレリーフです。その下にはユダヤ人犠牲者の記念碑がありました。

この教会の裏には今も Judenstrasse (ユダヤ人通り) という名がつけられている通りがあり、ここはユダヤ人地区でした。この町のユダヤ人迫害は、13 世紀末頃から始まりました。そして、ユダヤ人を追放した後の 1304 年、この教会が建てられました。ユダヤ人迫害の象徴となったこの教会は、今、深く謝罪し、その印を残すために、1988 年 11 月 11 日、豚のレリーフの下の石畳にブロンズの板を埋め込みました。真ん中には十字が刻まれ、そこから肉がはみ出たようなレリーフがあり、その回りには、ドイツ語で、「ユダヤ人たちがキリスト者によって屈辱を受け、十字架の印の下に 600 万人のユダヤ人が死んだ」ことが刻まれ、ヘブライ語で 130 編 1 節「主よ。深い淵から、私はあなたを呼び求めます。」が刻まれていました。



私がここを訪れたのは丁度アウシュヴィッツ解放記念日の直後でしたので、市の各党から、美しい花束が添えられていました。リボンのひとつには、「あなたがたを迫害した事実を、私たちは決して忘れません」と書かれていました。



ドイツは、終戦 50 周年記念を迎えたとき、ホロコーストに対して永久謝罪を続けることを決めました。永久に謝罪するのは永久に許されないからという意味ではなく、永久に謝罪の思いを表し続けること、そしてこの事実を永久

に記憶にとどめて二度と同じことを繰り返さないためです。

ところで、ホロコーストといえば、前ローマ法王によって破門されていた超保守派であり、ナチ時代のユダヤ人大虐殺を否定するウィリアムソン司教を、現ローマ法王が復権させたことで、今、大きな波紋を呼んでいます。このことに対して、ホロコーストを行い、そのことを深く悔い改めて謝罪を続けてきたドイツでは、どの新聞も大きな抗議声明を発表しました。メルケル首相は、ドイツ人である現ローマ法王に、抗議の電話までしたほどでした。

●お祈りください

そのような中、私は今、2月24日～3月6日に予定されている「ヨルダン・イスラエル旅行」の準備をしています。現在、私たちが訪問する先々について書かれた聖書箇所を書き出しているところですが、その箇所を読み、熟考するだけで、もうすっかりガリラヤ湖畔でイエス様とともに過ごし、またエルサレムにて、十字架の道を共に辿っているような思いです。愛するイエス様をご自分の地、ご自分の民のところに来られたのに、拒否されて十字架にかけられたこと、そして復活し、イエスを信じるご自分の民だけでなく、ここから異邦人にも救いをもたらしてくださったこと、そしてユダヤ人の信仰が回復されてこの地に再臨されること、千年王国が建てられることなどを、一日中思いめぐらしています。

私たちは、愛する人が生まれ育った町に、国に、是が非でも行ってみたいと思うものです。だとすればなおさら、私たちのためにいのちまで捧げてくださった愛するイエス様の国に何とかして行ってみたいと思うのではないのでしょうか。私もそのような心ときめく思いでイスラエルに行く準備をしています。そして、神がご自分の栄光を表すために特別に選ばれた民、特別に選ばれた国、特別に選ばれた町のために祈り、行く先々で愛するイエス様にお出会いし、イエス様のところに触れる旅となることを、心から願っています。旅行の参加者は15名です。どうぞ、主の守りと祝福をお祈りください。

それでは、今回は少し遅くなりますが、旅行から戻ってから報告をさせていただきます。主の溢れるご愛が、皆様とともにありますように！

工藤篤子